〔特別寄稿〕

大東文化大学の書道について

野口林造（白汀）

一　はじめに
二　大東文化大学の前身
（1）大東文化学院
（2）大東文化大学の理念と沿革
（3）文学部三学科の理念と書道との関係
三　大東文化大学書道の歴史的経緯
（1）大東文化大学書道の草創期
（2）大東文化大学書道の主たる経緯
（3）大東文化大学の歴代書道教員
四　書道教育に対する社会的ニーズ
（1）書の国際化
（2）本学の全国ネット
五　書道学科設立について
（1）学校教育における書の位置づけと最近の傾向
（2）本学の専門性と特色
（3）書道学科設立準備の推移概略
六　書道学科
（1）理念と目的
（2）学生の受け入れ
（3）授業科目編成と二コース制
（4）カリキュラムと抜粋シラバス
（5）書道授業担当教員
（6）書道学科主催展覧会
（7）オリエンテーション合宿
（8）課外授業
七　書道学会
八　書道研究所
（1）理念と目的
（2）研究成果と事業実績
九　書道部
（1）大東の書道部
（2）現書道部の活動
付　歴代書道教員作品

一　はじめに

全国にさきがけて、大東文化大学に「書道学科」が誕生した。

国際化時代、諸外国との文化交流も盛んになり、日本文化の原点の一つとして書道は高く評価されている。

私学で「書」「書学」を学びたい受験生の多くが本学を目標としているのが実情であり、大学の特色（後述）を出す上でも、書道学科というまだ他の大学にはない学科を設立、発足したということで、本学そのものもアピールできたと考える。

近年、公立・私立とも高等学校芸術科において、新しく書道科や書道コースが設立されつつある。これは書芸術、書学、書道教育にとっても喜ばしいことである。平成一三年度から四国大学においても書道文化学科が設立されると聞いている。

学校において生徒・学生の個性や特性を重視する傾向が、全国的になって進んでいると思える。

このような人材を受け入れるためにも、書道学科の設立は意義があると考えられる。現在、本学では書道を学ぶには、文学部の日本文学科・中国文学科・教育学科が主で、他に法学部・経済学部・外国語学部・国際関係学部の学生が総合教育科目の中で書道を学んでいる。また書道は教員免許状取得のための専門教育と位置づけられてきた。しかしこれでは履修時間や選択に限りがあり、書道を専門的に学びたい学生にとっては不十分であった。

幸い、本学は書道の長い伝統があり、斯界から「書芸術、書学、書道教育において大きな実績を挙げている」との社会評価を得てきた。またこれとともに大学側でも教員採用、施設設備の充実に力を入れてきているので、「書」と「書学」の教育、研究の基盤が確立されつつある。さらに本学には優秀な人材が揃い、全国的に見ても群を抜いていると思われる。そこでこれを基にし、より高度で、大学として特色ある専門性を確立する上でも、書道学科の設立の必要性が強かった。（さらには大学院開設の要望もある。）

これらがよく調和して書道学科の設立が実現した。ここでさらに大東文化大学書道学科の「書」「書学」についてより理解を深めていただくため、順を追って述べることにする。

二　大東文化大学の前身

（1）大東文化学院

大東文化大学は一九二三年（大正一二）九月に、「財団法人大東文化協会」によって創設された「大東文化学院」（旧制専門学校、本科三年・高等科三年）を前身とする大学である。一九三八年（昭和一三）二月に改正された本科には、第一部修身漢文科、第二部国語漢文科、第三部東亜政治経済科が置かれた。

創設の趣旨は、「明治以来、欧米の物質文化の急激な摂取の中で、東洋の文化や精神が軽視されるに至った。東洋文化はわが国古来よりの伝統的文化であり、それは人倫道徳に基づくものである。そのために儒学の振興・漢学の振興をはからなければならない。さらに、東洋文化の尊重とともにひろく世界の知識をも学ばなければならない」（『大東文化大学の現状と課題』「1. 大東文化大学の沿革」一九九七年度）ということにある。この趣旨を理念として、大東文化学院は漢学者を中心とする有志によって創設された。

（2）大東文化大学の理念と沿革

一九四八年（昭和二三）七月三〇日に「財団法人大東文化協会」が「東京文政大学」の設置申請をし、一九四九年（昭和二四）四月に認可を得て出発した。

この時の目的として、「本大学は東方文化の伝統を生かして文政諸学を講究し、以て新しい世界文化の進展に寄与することを目的とする」とあり、使命として、「本大学はその目的を達成するため文政諸学についての知識の涵養と人格の向上に力を注ぎ、以て人類の平和と社会の幸福に貢献し得る人物を養成することを使命とする」とある。

この目的と使命は、「東京文政大学設置認可申請書」に明記されたものであり、新学制によって登場する大学の基本的な理念や使命であると思われるが、理念の特色として見られるのは、「東方文化の伝統」を生かすということであろう。この理念は、大東文化学院の「東洋文化の尊重」を継承したものであることが知られる。

この「東京文政大学」は、さらに一九五一年（昭和二六）二月に校名を「文政大学」と改め、そして今日の「大東文化大学」へと改称されるのは、一九五三年（昭和二八）三月のことである。

こうして今日の大東文化大学が成立するのであるが、現在の学則に掲げる「建学の精神に基づき」という建学の精神は、間接的には大東文化学院の理念にあり、直接的には東京文政大学の目的と使命にある。

そして本学は飛躍発展の道をたどり、一九六二年（昭和三七）には文政学部を文学部（日本文学科・中国文学科）と経済学部（経済学科）に改組し、一九六三年（昭和三八）には経済学部に経営学科を増設した。一九六七年（昭和四二）には東松山校舎を開校し、教養課程を移設し、文学部に英米文学科を増設し、続いて一九六八年（昭和四三）には外国語学科を増設した。さら

に一九七二年（昭和四七）には文学部外国語学科を廃止し、外国語学部（中国語学科・英語学科）と文学部（教育学科）を増設し、一九七三年（昭和四八）には法学部（法律学科）を設置した。そして一九八六年（昭和六一）には国際関係学部（国際関係学科・国際文化学科）を設置し、一九九〇年（平成二）には法学部に政治学科を増設し、一九九三年（平成五）には外国語学部に日本語学科を増設した。これと歩調を合わせるように大学院の設置についても拡充が行われた。また二〇〇〇年（平成一二）四月には、待望久しい全国初の書道学科が文学部の中に誕生したのである。

これらにより現在は六学部十五学科、研究科、専攻科、別科（日本語研修課程）等の中に一四、〇〇〇人余の学生数、六五二名の教員数を擁する文科系総合大学となったのである。

（3）文学部三学科の理念と書道との関係

このような歴史の中にあって書道は、今まで文学部教育学科の中に教職科目として位置づけられてきた。書道関係科目を多く履修し、学習してきた学生は、主に中国文学科、日本文学科の学生であった。そしてわずかではあったが教育学科の学生も含まれていた。

ここで長く書道に関係があり、これにたずさわって来た文学部三学科の理念・目的を記すことにする（『大東文化大学の現状と課題』一九九七年度・六六頁～六八頁参照）。

先ず文学部は、「東方文化を根幹として、文・経諸学の理論応用を研究し、その蘊奥を究め神髄を明らかにし、もって人格の陶冶と知識の涵養に努め、真理と正義を愛する自主的精神に充ちた穏健中正なる国民を育成し、国家および社会文化の進展に寄与するとともに、人類の福祉と世界の平和に貢献し得る有為な人材を養成することを目的とする」とある。

日本文学科は、「日本文学を生成させた時代や社会に対する認識を重視するとともに、日本文化史における位置づけ及び世界文学から見た諸特質の根源的解明等々、巨視的な観点からながめ、こうした対応を通じて、個々人の調和的人格形成を図ること」を見据えている。

中国文学科は、「漢学、つまり、儒学思想だけでなく、道家思想を含めた中国思想や文学、語学、歴史学、書道芸術、更には日本儒学にも及ぶ幅広い分野、領域に柔軟に対応し、学ぶ者の人格形成に役立たせること」を目的としている。

教育学科は、「第一に、教育界に貢献する優れた人材のための新たな研究分野を開拓し、時代に即応し、実社会の要請により結びついた教育によって、広い視野をもった教養豊かな人材を育成することにある。第二に、建学以来、本学が半世紀近くにわたって、中等教育界に優秀な人材を送り続けてきた歴史と、その確固たる実績を基盤に、それを新たに初等教育界に継承、発展

させること」に意義があるとしている。

以上を見れば、何らかの形で書道に関係あることが解るが、特に中国文学科は「書道芸術」とうたっている通り、今日まで書道と中国文学科は密接な関係があったことがうかがえる。日本文学科では日本文化における漢字及び仮名書道に関わりがあり、教育学科は教員養成の中で深く関わってきた。

たとえば、三学科の二〇〇〇年度（平成一二）「書道関係授業受講者」の延べ人数は二、〇九二人にのぼり、書道の卒論指導者は五六人（中国文学科三二人・日本文学科二四人）を数える。これによっても書道とこの三学科とが密接な関わりを持つことが解る。そして近年では、法学部・外国語学部・経済学部・経営学部・国際関係学部の学生も、書道を多く学習する傾向にある。

以上の通り、書道は本学園において大きなウエートを占め、色々の面で重視され育てられている。これが大東文化大学書道の発展の根元になった。

三　大東文化大学書道の歴史的経緯

（1）大東文化大学書道の草創期

一九二三年（大正一二）、本学は東洋学術文化普及の学府として、漢学を核として創設されたことは前述したとおりである。そのため漢学の付帯文化である書道は特に重視され、開学当初よりこれを正科（必修科目）に位置づけ、高塚竹堂が初代教官として担当した。当時、本学では漢字を研修するための教養として詩、書、画の指導につとめ、学生にはこれを三位一体として勉学することが要求されていた。

九段時代〈一九二四年（大正一三）～一九四一年（昭和一六）〉は、幸いにも漢学者に能書家が多く、高塚竹堂の後、塩谷温、鵜沢総明、土屋竹雨などが書道の指導に当っている。

この正科の書道が、その後の本学書道の実際面での起源をなすものといえるが、教科外に「書画道部」があって、この活動にも特筆すべき事実がある。一九三三年（昭和八）、書画道部が「東都大学高専書画道連盟」を結成してその盟主となり、山本悌二郎を会長に、犬養木堂、松平頼寿伯爵等を顧問に仰ぎ、宮島詠士、河井荃廬、杉渓言長男爵を審査員とし、また原田尾山教授の斡旋で東京日日新聞の後援を得、銀座伊東屋で展覧会を開催した。この展覧会は、当時日下部鳴鶴流一色であった日本書壇への覚醒を促す警鐘として、一石を投じたものであると高く評価され、結果として本学書画道部の名も世に知られる草分けになった。しかしこの連盟展は諸般の事情により、一九三五年（昭和一〇）を以てその幕を降ろし、その後本学では、野本白雲を中心

として、学内での書道研鑽に専心することになった。

顧みれば、この九段時代、本学の書道の隆盛は、学内での努力と、当時の日本書壇を代表する者との協力とがもたらした結果であるということができよう。

土屋竹雨が当時を代表する書家と親交があり、宮島詠士をはじめとする、多くの書壇の重鎮に援助を受けたことが、その後の方向性を決めたといっても過言ではない。

九段時代の後、池袋前期時代〈一九四一年（昭和一六）～一九四六（昭和二一）〉と、青砥時代〈一九四六（昭和二一）～一九四九（昭和二四）〉は、時代と運命を共にしながら苦難の道を乗り越えて、書道の次代の方向が探られていった。

土屋竹雨学長を中心に、真田但馬、上條信山の両者がこれを支えて、大東の書道再建に尽力され、これが次の池袋後期時代〈一九四九（昭和二四）～一九六一（昭和三六）〉になって実を結ぶことになったのである。この時期には「書道公開講座」がすでにスタートとしている。『大東文化大学五十年史』（四九九頁～五〇一頁）より文章を引用しておく。

「書道は大東の伝統の一つであり、九段時代には必修科目として正科に課せられていたほどである。また漢文と書道とは極めて密接な関係にあり、学者にして一流書家であった本学教授も枚挙に遑がないほどであり、このような環境から大東出身の書道家が輩出したのも当然である。その最たるものとしては、名越豊氏（号は霞渓・高二卒）があり、一流書家として全国的に盛名を馳せ、また現在に於ては上條周一（号は信山・高十六卒）ありて、日本書壇に確固たる地歩を築いている。また全国に活躍する大東卒業生の多くが、職場を通し、またその地域に於て隠然たる実力を有していることも事実である。このような実績が今日の大東書道を育成した背景であるといっても過言ではない。しかし今日の隆盛に至るまでには、先輩諸氏の努力と大学当局の遠大な理想と緻密な企画によるものがあり、これなくしては大成を帰することはできなかったのである。池袋移転後、母校再建に懸命であった昭和二十七年、書道講座を中国文学科及び日本文学科に併設し、講座外選択科目として設置した。而してこれが企画立案、さらに直接指導の任に当ったのは真田但馬（高十一卒）・上條周一の両氏であり、また書家であり詩人であった土屋学長が率先誘掖の任に当った。つまり学長を中心とした卒業生の尽力によって設置されたのが、大東書道の起源である。設置後、学生間に於ても極めて好評、また世間の視聴をも集め、聴講生も漸増した為、翌二十八年度には正式に学科課程中に編入し、山崎節堂・松井如流の両大家を迎えて陣容を整え、さらに二十九年度には熊谷恒子女史を迎えて名実ともに斯界に誇る大東書壇を形成した。その頃、豊道春海を盟主とする日本書道連盟は、書道教師の再教育を目標として、書道講座を昭和二十六年より家政大学に於て継続開講していたのであるが、民間団体である同連盟では単位を授与することが不可能であるという障害もあり、かねて昵懇であった土屋学長と提携し、昭和二十九年より共催

の書道講座を本学に於て公開することとなった。八月一日より二日間、本学よりは土屋学長を始め上條・真田・山崎・松井の各教授、連盟側よりは豊道・尾上両芸術院会員を始め、平尾・手島・上田の各氏外一流書家が出講し、近来まれに見る充実した講座を公開した。聴講生は、北は北海道、南は熊本から馳せ参じ、約一五〇名を超える盛況であり、なお受講生には書道科四単位を授与する特典もあり、俄然天下の耳目を集めることとなった。爾来、昭和三十三年に書道連盟と分離し、大東単独の主催となったものの、その後四十六年に至るまで継続開講して来た。なお開講当初の頃は学生募集に懸命な時期であり、これら受講生一人一人に対し書道愛好生徒の本学受験を懇請し、その推薦によって入学した学生も多く、また十数年の長期にわたる本講座の開講は、大東書道の評価を一層たかからしめるとともに、また本学学生にして日展その他の展覧会に入選するもの連年跡を絶たず、このような実績が今日の大東書道を築き上げてきたものである。」

以上のごとくであるが、初回の公開講座（第四回夏季書道講習会）の講師・運営委員氏名は次の通りである（『大東文化大学五十年史』五〇四頁～五〇五頁）。

日本芸術院会員	尾上　柴舟	日本芸術院会員	土屋　竹雨
日本芸術院会員	豊道　春海	日展審査員	青山　杉雨
日展審査員	石井　雙石	新潟大学教授	石橋　犀水
日書美審査員	飯島　春敬	書芸審査員	伊藤　神谷
日展審査員	宇野　雪村	前日展審査員	上田　桑鳩
毎日展審査員	植村　和堂	日展参事	江川　碧潭
毎日展審査員	金子　鷗亭	文部事務官	金田　心象
大東文化大教授	上條　信山	元学習院教授	熊田伝一郎
日書美審査員	熊谷　恒子	毎日展審査員	桑原　江南
日書美審査員	桑原　翠邦	前日展審査員	近藤　秋篁
大東文化大教授	真田　但馬	前日展審査員	高塚　竹堂
日本書道研究会長	田中　金峯	元豊島師範講師	田中　海庵
前日展審査員	津金　崔仙	前日展審査員	手島　右卿
日書美審査員	中村　素堂	日書美審査員	仲田　幹一
前日展審査員	平尾　孤往	書芸審査員	藤本　竹香

日本女子大講師　藤田　讃陽　　日書美審査員　藤田　霞畦
国立博物館　堀江　知彦　　日展審査員　松井　如流
前日展審査員　柳田　泰雲　　大東文化大教授　山崎　節堂
日本書道連盟参与　若海　方舟

助講師

岸本　太郎　佐々木寒湖　浜田　素山　大井　錦亭　稲村　雲洞　山岡　聴濤　中野　白呂
栗野　雪山　笹谷　醴泉　小菅　秩嶺

運営委員

上條　信山　桑原喬林子　真田　但馬　田中　海庵　松井　如流　山本　正一　吉村　五郎

(2) 大東文化大学書道の主たる経緯

その後、本学の書道は第二次大戦後、ことに昭和二〇年代後半頃から著しい充実と展開を見せた。板橋・東松山時代〈一九六一（昭和三六）〜〉がこれにあたる。

真田但馬に引き続き、松井如流、山崎節堂、熊谷恒子、上條信山、青山杉雨、宇野雪村、田邊齊盧、安藤搨石など斯界のビッグネームが教授や講師の書道、そして学術面では真田但馬、加藤常賢、原田種成、石井勲、伏見冲敬など各教授陣が名を連ね教鞭をとったため、全国各地から書道、書学を志向する学生たちが競って来学した。従って本学卒業生で現書道界及び学界、教育界でめざましい活躍をしている人々の数は、他の大学と比較すると一頭地を抜いている。

また、学内だけでなく、広く社会に対する書道の普及、振興活動を果たすべく、一九六八年（昭和四三）に「大東文化大学書道センター」が青山杉雨の尽力により設立された。機関誌『大東書道』を発刊し、競書、法帖、碑刻、古筆の解説、手本による各種書法の指導を行う一方、毎年二回書道講習会を開催した。大学主催による「全国書道展」も開催するようになった。

一九八八年（昭和六三）四月、「書道文化センター」は大学直属の「書道研究所」として改組され、従来の「書道文化センター」を発展継承して現在に至っている。

一方、学科編成で、書道は教育学科に所属することになったが、実際は日本文学科・中国文学科の学生を対象としてきた。この各学科間において、書道科目について色々調整をとらなくてはならなかったが、これを献身的に各学科の調整を計ったのが永井暁舟であった。永井教授により、本学の書道教育が軌道に乗ることができたとの評価は高い。

また今関脩竹、浅見筧洞、続いて今井凌雪が教鞭をとり、益々大東文化大学の書道は力を増し充実した。さらに仮名では東山一郎、村上翠亭が加わって、仮名書道も厚みを増した。そして教育界と教育書道、さらに文部省にも精通した久米東邨も加わって大東の教育書道面でも大きな力と基いを築いた。この頃を前後して本学の書道学科設立の機運が熟していった。

またこの期間において、書道実技面で、佐々木寒湖、三田清白、岩井韻亭の漢字、奥田家山、浮乗清郷の仮名、古川悟、菅原石廬の篆刻、さらに毛利和美の絵画論、学術・実技両面にわたり西林昭一が貢献、そして東地滄厓等が本学書道に大きく尽力したことは見逃せない。

(3) 大東文化大学の歴代書道教員

以上の通り、本学の書道教育は数多くの先生方に支えられて今日に至っている。因ってここに感謝の意を込めて、大東文化大学成立後の、歴代の書道教員のお名前を銘記しておきたい。なお、専任・非常勤、所属および名・号の別を設けず、また現職の先生方を除いて挙げることをお断りしておく。(文末の「付　歴代書道教員作品」参照。)

真田　但馬　　上條　信山　　山崎　節堂　　松井　如流　　熊谷　恒子　　青山　杉雨
宇野　雪村　　浮乗　水郷　　加藤　常賢　　原田　種成　　安藤　搨石　　石井　　勲
田邊　齊廬　　伏見　冲敬　　西林　昭一　　永井　暁舟　　加藤　達成　　浮乗　清郷
毛利　和美　　今関　脩竹　　浅見　筧洞　　小山やす子　　佐々木寒湖　　三田　清白
奥田　家山　　今井　凌雪　　東山　一郎　　村上　翠亭　　古川　　悟　　久米　東邨
菅原　石廬　　東地　滄厓　　岩井　韻亭　　宮澤　正明　　須永由美子　　鈴木　慶子
髙城　竹苞

四　書道教育に対する社会的ニーズ

(1) 書の国際化

文字は日常生活や社会一般において、近年パソコンなどのＯＡ化が進み、書写離れの傾向を強めているが、こうした中にあって、書及び書道教育に関する社会的認識と評価は逆に一層の高まりを見せている。これは人間形成、精神文化の向上で書の果たす役割の大きさが理解されてきた結果であろう。

一例をみると、現在書の展覧会は空前の盛況を極め、日展や生涯学習としてのシルバー展など、年間を通じて切れ目がないほど各地で開催されている。また海外でも「日本の書展」が開催され、世界各国で好評を博している。さらに各地で書道関係の学会も開かれている。こうした影響も加わって、若い年齢層には将来、書家、学者を目指す者や、博物館・美術館などの学芸員を志望するなど書道関係の専門職を目指す者が増えている。

（2）本学の全国ネット

現在教育界の第一線で活躍している本学書道関係のＯＢはかなりの数にのぼる。最近の調査（一九九九年）では、最多の埼玉県の六〇名をはじめ、千葉県の四八名、熊本県の三五名（公立のみ）など、北海道から沖縄県までのほぼ全県に亘って相当数を占めるものと考えられる。

これに非常勤のＯＢを加えるとさらにその数は大きくなると思われ、日本全国の大学の中では他にその例を見ない。

このＯＢの中には、各県において重要な指導的立場にあり、各地域の書道教育の中心的役割を担っている者も少なくない。また書家として日展、毎日展、読売展などで活躍している者も年々増加の一途をたどっている。例えばわが国の書の最高水準を示す日展では、審査員をはじめ、特選受賞者および入選者が続出している。入選においては全入選者七〇五名の内、本年度（二〇〇〇年）の本学関係ＯＢは六九名で、全体の一割近くを占めている事実は、その証明の一つである。この実態は、在学中の課外レッスン、または卒業後の書道界での活躍の証でもある。また学界では、関係する学会などで、国内、国外研究、研修に成果を上げ、多方面において活躍している。

五　書道学科設立について

（1）学校教育における書の位置づけと最近の傾向

今日の学校教育における「書写」「書道」は幾多の変遷を経て、小中学校では国語科に「書写」が、高等学校では芸術科に「書道」が置かれている。

後者の目標は、「芸術的な能力を伸ばし美に対する感性を高めるとともに、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う」ことにある。その内容は表現と鑑賞があるが、表現においては「漢字の書」「仮名の書」「漢字仮名交じりの書」の三つの柱によって指導することになっている。このような現場の教育を反映して、書道に関する認識が高まり、芸術を愛好し、

書に深い関心を寄せる者や、専門的に書の道に志す高校生が次第に増えつつあることは事実である。

特に教育の多様化ということで、高等学校の教育の現場において、最近書道教育への関心が高まりつつあることは注目に値する。すでに書道科を開設した埼玉県立大宮光陵高校、徳島県立名西高校、奈良県立桜井高校、埼玉県伊奈学園総合など、「書道科」「書道コース」を設けている公立、私立高校が現在十三校あり、今後益々増加する傾向にある。以上を考えてみても本学書道学科は、時代の要請もあり、期待は大きいと思われる。

(2) 本学の専門性と特色

本学において、従来のままでは社会のニーズに応えるべき、書道教育における専門性を高めるには不十分であることが解ってきた。そこで書道学科設立構想が打ち出されたのである。実現のためには、より確かな設置の趣旨、目的、書道学の理念、学科の目的、特色（どのような人材を育成するのか）などから、教育課程編成の基本的な考え方としての授業内容、教育法および履修指導の方法、入学者の選抜方法、卒業後の進路、就職の見通しなどが問われることになる。

これに対する資料収集を始めとして、さまざまなことについての研究に入ったが、難問山積であった。そこで書道の教員を中心に何十回となく会議を持ち、一つ一つ難問を解決していった。

特に苦労したのは「文学部各学科の協力、賛同をいただくこと」であった。それは長い間、本学書道教育に懸命に取り組んできた担当教員にとって、大きな検討課題であった。特に教育学科の協力、またそれにもまして中国文学科・日本文学科・英米文学科の先生方の賛同が得られたこと、同時に学園の支援を得ることができたことは幸いであった。

次は文部省に提出する許可願い申請書作りであった。提出過程をまとめてみると次のようになる。

(3) 書道学科設立準備の推移概略

▽ 一九九三年（平成五年）

- 書道研究所と書道専任教員によって本学書道教育の現状の調査と検討開始

▽ 一九九四年（平成六年）

- 書道研究所の研究業務の一つとして「書道将来計画策定委員会」を組織して検討を継続
- 教育免許対応での書道教育の限界が指摘され、学科設置を要望するとの結論に至る
- 「書道学科設置計画趣意書（案）」の作成を開始

▽一九九五年（平成七年）

・「書道学科設置計画趣意書（案）」の提出（書道研究所発学長宛）

・理事会で審議の結果、前向きに対応する旨を決議

▽一九九六年（平成八年）

・理事会のもとに「大東文化大学書道学科（仮称）設置にかかる有識者会議」を設置

・右有識者会議で審議の上、設置すべしの答申を得る

・理事会で設置に向けて検討する旨を決議

・文学部教授会に「書道学科設置検討委員会」を設置し検討を開始することを承認

▽一九九七年（平成九年）

・「書道学科設置検討委員会」の委員を選出して検討開始

・設置申請にかかる文書類の作成開始（平成一一年三月まで継続）

・文学部教授会に「書道学科設置準備委員会」を設置し検討を開始することを承認

▽一九九八年（平成一〇年）

・「書道学科設置準備委員会」の委員を選出して検討開始

・書道学科設置に関して文部省に事前協議

▽一九九九年（平成一一年）

・設置準備委員会の審議終結

・文学部書道学科の設置計画について文学部教授会承認

・同上評議員会、理事会承認

・「大東文化大学文学部書道学科設置認可申請書」を文部省に提出（四月・七月）

・同上認可（一〇月）

・学科設置案内と学生募集

▽二〇〇〇年（平成一二年）

・書道学科入学試験（二月）

・文学部書道学科開設（四月）

六　書道学科

（1）理念と目的

文部省に提出した「大学等の設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由を記した書類」に、「独自の伝統文化である『書』についての教育と研究を本来的・総合的に推進して、日本文化及び世界文化の進展により一層寄与できるようにする」ことを、学科設置の意義として掲げた。さらに同書類に「書道学の理念」と「学科の目的・特色」について次のように掲げた。

書道学の理念＝書道学は、漢字文化及び仮名文化に立脚する「書」の本質を、伝統的視点はもとより社会的視点や学際的視点及び未来的視点等広い視点から解明し、歴史・理論・技法・鑑賞・表現等を組織的体系的に考究するものである。

学科の目的・特色＝書道学科においては、「書学・書道史」「美学・芸術学」「書の研究・作品制作」を中心に書道学の各領域の教育と研究を通して、伝統文化の尊重と発展に努め、創造性に富む人間性豊かな人材の育成を目指す。

この理念と目的・特色の達成のため、本学科に「書コース」と「書学コース」の二コースを立てることを「教育課程編成の基本的な考え方」とした。なお教員免許状取得に関わるものについては、「諸資格講座」に位置づけて全学的に対応できるようにした。

（2）学生の受け入れ

書道学科が文部省から認可されたのを機に、学生の受け入れについて次のようにまとめた。

多様な方式の入学試験を実施することにより、多彩な人材を受入れるという第一義的な目的にかなうことは当然であるが、それ以外に積極的な姿勢が、受験生サイド、さらには一般社会に対してもアピールしうるものであること。

しかし、いたずらに受験生の当惑や混乱を招かないよう配慮しながら、書道学科のイメージを良くしていくよう努めていく。

以上の考え方をもとに、二〇〇〇（平成一二）年度入学試験は左記を実施し、学生の受け入れを行った。

①一般入試　i全国入試（二教科）　ii一般入試（三教科）　iii一教科入試（メジャーマッチ／クリエイティブ）

ついで二〇〇一（平成一三）年度入学試験は左記を実施し、学生の受け入れを行いつつある。

①公募推薦制

②指定校推薦制

③自己推薦制
④大学入試センター試験
⑤一般入試　i全国入試（二教科）　ii一般入試（三教科）
⑥外国人留学生試験

（3）授業科目編成と二コース制

学科目編成は、文部省に提出した内容に沿って進めることを基本としながら、先ずは基礎教育科目、専門教育科目と総合教育科目を効果的・有機的に関連づけていく。

専門教育科目については、書道学に関する教育と研究に必要とされる授業科目を開設し、その教育と研究が基礎から発展へと組織的・段階的に進められるように、左記のように編成する。

①書学・書道史、美学・芸術学等に関する授業科目
②書の研究と作品制作等に関する授業科目

第三年次から、次の主旨にそって「書学コース」と「書コース」の二コース制をとって単位履修を進めていく。

①「書学コース」では書の制作にも素養を持った書学・書道史、美学・芸術学等の研究者の育成を目指す。
②「書コース」では書学・書道史および美学・芸術学にも見識を持った書作家の育成を目指す。

右記のため、第一・第二年次では、指定する基幹科目について、二コースとも共通に履修を進めていくようにし、コース制履修については、第三年次からとする。なお、当該コース指定科目以外の科目の単位履修については随意とする。

卒業研究については、卒業論文とする。ただし「書コース」については卒業制作として書作品を制作し、それに関する「作品制作論」を添えるものとする。

（4）カリキュラムと抜粋シラバス

書道学科の授業は、多くの教授・講師陣が各専門分野を担当して行われている。特に専門分野の開講授業の一部を抜き出してみると次のようになる。

先ず特色ある授業として「書道学基礎演習1」「書道学基礎演習2」がある。これは基礎教育科目であり、必修科目である。

「書道学基礎演習1」（概要）

書道学の各領域・分野について、第一年次の学生を対象にして、一一名の教員が担当し、オムニバス方式によってそれぞれの専門とするところを切り口にして導入を図っていく。そのことを通して、書道学科の学生としての意識づけや視野の形成等を図り、研究目標設定への自覚を促すとともに、今後の生活や活動の在り方を見通すことができるようにする。この主旨に従って以下の授業が行われる。

新井儀平教授―古代人と文字の関わり合い
田中裕昭教授―楷書の魅力を探る
田中有教授・野口林造教授―中国の書「歴史と人物」
清水治夫教授―仮名の書の魅力と鑑賞
古谷稔教授―書と日本文化Ⅰ
高木厚人助教授―大宮人の美意識
河内利治助教授―中国学と書
河野隆専任講師―文字を刻る～表現と技法～
斎藤公男講師―書と人間
高木茂行講師―行草書の魅力を探る

「書道学基礎演習2」（概要）

「書道学基礎演習1」を履修した上で、第二年次の学生を対象にして、前年度と同様に一一名の教員によるオムニバス方式により進める。講義のみではなく演習や討議方式なども織り混ぜる中で、相互理解及び内容の広がりと課題意識を高めつつ、第三年次以降の専修コースの選定に向けて、それぞれの興味・関心・志望を鮮明にしていくことができるようにする。この主旨に従って同様に以下の授業が行われる。

新井儀平教授―書体発生のなぞ～映像によって探る～
田中裕昭教授―楷書とその創作
田中有教授―書の捉え方～書論に見る～
野口林造教授・高木茂行講師―行草書とその創作
清水治夫教授―大字仮名の美（現代の仮名の書）
古谷稔教授―書と日本文化Ⅱ

高木厚人助教授―書の美と仮名の書の創作
河内利治助教授―風土と書（中国・日本）
河野隆専任講師―書画と落款
斎藤公男講師―漢字仮名交じり書へのいざない

次に「書」実技では左記の科目があり順次学習する。（傍線は必修科目）

【一年次】
「楷書法1」「行草書法1」「仮名書法1」「篆隷書法1」

【二年次】
「楷書法2」「行草書法2」「仮名書法2」「漢字仮名交じりの書法1」「篆刻法」

【三年次】
「漢字作品制作演習」「仮名作品制作演習」「漢字仮名交じり作品制作演習」「篆刻作品制作演習」「篆隷書法2」
「漢字仮名交じりの書法2」「楷書法演習」「行草書法演習」「篆隷書法演習」「仮名書法演習1」「書道用具用材加工演習」
「実用書法」

【四年次】
「漢字作品制作演習」「仮名作品制作演習」「漢字仮名交じり作品制作演習」「篆刻作品制作演習」「仮名書法演習2」
「篆刻法演習」「中国絵画演習1」「中国絵画演習2」「作品制作特別演習」「卒業研究」

一方、「書学」においては確かな理論を通して書を究めてゆくため、次の科目があり、順次学習する。

【一年次】
「中国書道史通論」「日本書道史通論」「書道概論」

【二年次】
「漢字書法論」「仮名書法論」「篆刻学概論」「近現代中国書道史」「近現代日本書道史」「漢字作品制作論」「仮名作品制作論」
「金石学」「文房四宝概説」「書写書道教育学概説」「書道文化演習1（国内）」

【三年次】

「書学演習」「美学・芸術学演習」「中国書道史演習」「日本書道史演習」「古筆学概説」「書道生涯学習論」「芸術心理学」
「名跡鑑賞（書論を含む）」「書論講読」「書道美学論」「文字学概論」「書写書道教育学演習1」「中等書写研究」
「総合演習・伝統文化と書」「総合演習・現代社会と書」「現代芸術論」「芸術経営学」「書道文化演習2（海外）」
「教科教育法（書道）」「中国学と書」「日本学と書」

【四年次】
「書学演習」「美学・芸術学演習」「中国書道史演習」「日本書道史演習」「コンピュータ・アート研究」「書応用表現論」
「書写書道教育学演習2」「卒業研究」

「卒業研究」
一年次・二年次おいて「書道学基礎演習1」「書道学基礎演習2」を履修し、三年次・四年次でコース別、課題別に担当教員のもとで演習活動を行い、その成果を踏まえて卒業論文として取りまとめる。その際、「書コース」については「卒業制作」と併せてそれに関する「作品制作論」を付して提出する。

これらの「書」「書学」を学んでゆく上でも、基礎教育の分野もおろそかにしては真の専門分野の勉学も深まらないし、研究上で支障をきたすことになる。そこで次の開講科目を履修する。

語学関係科目

「中国語学基礎演習1」「中国語学基礎演習2」（1年次必修科目）
「中国語学基礎演習3」「中国語学基礎演習4」（2年次必修科目）
「中国語中級表現Ⅰ」「中国語中級表現Ⅱ」「中国語中級講読Ⅰ」「中国語中級講読Ⅱ」（2年次選択必修科目）
「中国語上級表現Ⅰ」「中国語上級表現Ⅱ」「中国語上級講読Ⅰ」「中国語上級講読Ⅱ」（2年次選択必修科目）
「英語リーディングA」「英語リーディングB」「口語英語A」「口語英語B」「総合英語A」「総合英語B」
「時事英語A」「時事英語B」「英米文化表現A」「英米文化表現B」「英米作品講読A」「英米作品講読B」（1年次選択必修科目）
「フランス語基礎Ⅰ」「フランス語基礎Ⅱ」「ドイツ語基礎Ⅰ」「ドイツ語基礎Ⅱ」（2年次選択必修科目）

情報関係科目

「情報処理A」「情報処理B」「情報処理C」「情報処理D」　（教員免許状取得必修科目・1年次選択必修科目）

総合教育科目

「総合体育Ⅰ」「総合体育Ⅱ」　（1年次必修科目）
「哲学A」「哲学B」「情報科学A」「情報科学B」「東洋史A」「東洋史B」「芸術の歴史A」「芸術の歴史B」
「文化人類学A」「文化人類学B」「法学A」「法学B」「比較文学A」「比較文学B」「現代文化A」「現代文化B」
「健康スポーツ科学B」「体育実技A」「体育実技B」「体育実技C」「体育実技D」「総合教育特殊講義A」
「総合教育特殊講義B」　（1年次自由科目）

専門教育科目

「日本文学講読演習」「中国学講読演習」　（1年次選択科目）
「漢文学演習」「美術概論」「音楽概論」「美術教育A」「美術教育B」「美術教育C」（1年次自由科目）
「中国美術史」「日本美術史」　（2年次選択科目）
「美術特別研究」　（2年次自由科目）
「言語学概説」「日本文学概説1」「日本文学概説2」「中国文学講読2」「中国文学講読3」「中国文学講読4」
「中国哲学講読2」「中国哲学講読3」「中国哲学講読4」「中国文献学」「舞台芸術研究」　（3年次自由科目）

以上をみて解る通り、書道科目だけではなくあらゆる分野の科目が整然と用意されていることは、学生にとってこの上ない人間形成の場であるにちがいない。基本的な科目は全員が履修し、そして自分の進むべき道によって選択科目・自由科目を選んで履修できるようになっている。

これらのカリキュラムの中で、従来の学校教育の場には他に例がない科目を紹介しよう。それは「書道用具用材加工演習」である。書作で用いる筆・墨・硯・紙には、その制作過程の中で職人等の魂と技術が込められている。また、書写された作品は表装することにより、一段と見事な芸術作品として生気を見せるようになる。一方、古来、石や金属に刻された書の多くは、拓本

によって伝承されてきた。これらに理解を持つことも書の研究に必要であり、一流の職人のもと、オムニバス方式による演習でその精通を図っていく。「筆」「墨」「硯」「料紙加工」「表具」等についての講義と実技を展開する。

また、現代科学技術の進展に合わせ、「コンピュータ・アート研究」が開講されるが、これはコンピューターの機能を知り、操作の基本を学んだ上で、画像の入力法や処理法・加工法等を扱い、学んだことを運用して文字像の加工について操作できるようにしていくものである。その他の機能とあいまって、書の理解や学習及び研究の効率を高め、表現性や可能性を広げていくためのツールとして、コンピューターを活用していくことができるよう目指す。そして伝統ある書の中に新しい考え、表現・展開の開拓に役立たせようとするためのものである。

さらに、日本文学科・中国文学科・教育学科とリンクする科目も用意されている。「日本文学講読演習」「日本文学概説」、「中国学講読演習」「中国文学講読」「漢文学演習」「中国哲学講読」「中国文献学」、「美術概論」「美術教育」「美術特別研究」「音楽概論」「舞台芸術研究」等の学問分野へも広く掘り下げていく。例えば「中国哲学講読1」では『大学』『中庸』を扱う。言うまでもなく、『大学』『中庸』は四書の一翼を為し、朱子学の根本経典である。宋代以降の東アジアの思想に大きな役割を果たしたこれらの書を、朱熹の注で読み進め、併せて人間存在の根元を理解させるものである。

また、人間身体維持の基本である、「健康スポーツ科学」や、「体育実技」「総合教育特殊講義」と幅広く、教育内容を理論と実技の両面から充実した授業科目を整えてあり、魅力あるものとしている。

以上が、書道学科カリキュラムの大要である。

三・四年次になると、「書コース」と「書学コース」に分かれて、より専門的な授業内容になっていくが、そこに到達するには、一・二年次の基礎的学問及び書の厳しい学習をしておかなければならないことは言うまでもない。

(5) 書道授業担当教員

以上のようなカリキュラムを行っていくが、二〇〇一年（平成一三）度の、書道学科および教育学科の書道の授業を担当する予定である教員の顔ぶれ、計三六名は次の通りである（順不同・敬称略）。

[所属]	[氏名]	[所属]	[氏名]
書道学科	田中　裕昭	教育学科	和田　章
	新井　儀平		匂坂　恭子

野口　林造	中西　基広	
田中　有	藤島　幸彦	
古谷　稔	文田　牧人	
高木　厚人	山口　清三	
河内　利治	赤平　和順	
河野　隆	岩井　秀樹	
斎藤　公男	鈴木　定廣	
高木　茂行	谷村　俊二	
牛窪　勲	土橋　靖子	
陳　達明	原　奈緒美	
大島　守彦	樋口　咲子	
書道研究所　玉村　清司	福島　一浩	
日本文学科　佐々木新太郎	星　弘道	
中国文学科　吉田　篤志	慶徳　紀子	
山口　謡司	三宅　高司	
大橋　修一	宮沢　正明	
鷲野　正明		

この他、中国文学科開講科目として、林喬子・高澤浩一が書道の授業を担当している。

なお、今までの日本文学科・中国文学科・教育学科の書道の授業は、従来通り、教育学科開講科目として継続されていく。

また、右三学科との一部授業科目相互乗り入れが実現して、本学学生の書を学ぶ機会は更に広くなるよう工夫された。

(6) 書道学科主催展覧会

二〇〇〇年四月五日の入学式に併せ、東松山キャンパス1号館三階に新たにオープンした「書道学科コミュニティーギャラリィー」において、書道学科開設を祝う展覧会、《大東書道誌揮毫作家・歴代書道教員・書道学科専任教員　名品展》を挙行した。

本展に陳列した作家・教員の一覧を記しておく。

【大東書道誌揮毫作家】

〈漢字部門〉

木村知石（一九〇七～一九八三）日本芸術院賞・日展文部大臣賞・日展参事
岡本松堂（一九〇九～）日展総理大臣賞　日展参与
広津雲仙（一九一〇～一九八九）日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展参事
殿村藍田（一九一二～二〇〇〇）日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展参事
井垣北城（一九一二～一九八四）日展会員・毎日書道展審査会員
天石東村（一九一三～一九八九）日展総理大臣賞・日展評議員
泉原寿石（一九一二～一九八七）日展会員
藤岡九波（一九一六～一九八五）日展会員
花田峰堂（一九一九～）勲四等瑞宝章・日展評議員
安原皐雲（一九二二～）日展評議員
鈴木桐華（一九二二～）日展評議員
尾崎邑鵬（一九二三～）日本芸術院賞・日展文部大臣賞・日展理事
甫田鵡川（一九二四～）日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展理事
村寄鴨畦（一九二四～）日展会員
古谷蒼韻（一九二五～）日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展理事

〈仮名部門〉

深山龍洞（一九〇三～一九八〇）勲四等瑞宝章・日展評議員
西谷卯木（一九〇四～一九七九）日展総理大臣賞・日展評議員
森田竹華（一九〇八～一九七七）日展評議員
中村龍石（一九一三～一九九九）日展参与
池内艸舟（一九一四～一九九三）日展評議員

平田華邑（一九一四～一九九一）日展評議員
坪井正庵（一九一五～一九八八）日展会員
伊藤鳳雲（一九一七～）日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展参事
高木聖鶴（一九二三～）日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展理事
榎倉香邨（一九二四～）日本芸術院賞・日展文部大臣賞・日展理事

【歴代書道教員】

松井如流（一九〇〇～一九八八）本学名誉教授・勲三等瑞宝章・日本芸術院賞・日展参事
浮乗水郷（一九〇八～一九八四）本学元非常勤講師・日展会員
今関脩竹（一九〇九～一九八九）本学元教授・日展評議員
上條信山（一九〇六～一九九七）本学元非常勤講師・勲二等瑞宝章・日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展理事・文化功労者
青山杉雨（一九一一～一九九三）本学元教授・元書道文化センター所長・文化勲章受章・日本芸術院会員
日展理事・文化功労者
宇野雪村（一九一二～一九九五）本学元教授・勲三等瑞宝章
浅見筧洞（一九一四～）本学元教授・元書道文化センター所長・日本芸術院賞・日展総理大臣賞・日展参事
今井凌雪（一九二二～）本学元教授・元書道研究所所長・筑波大学名誉教授・日本芸術院賞恩賜賞
日展総理大臣賞・日展理事・勲三等瑞宝章
村上翠亭（一九二八～）本学元教授・元書道研究所所長・筑波大学元教授
東山一郎（一九二八～）本学名誉教授・元書道研究所所長・日展評議員
古川　悟（一九二九～一九八八）本学元教授・日展会員

【書道学科専任教員】

田中　裕昭（節山）　新井　儀平（光風）　清水　治夫（透石）
野口　林造（白汀）　田中　有（東竹）　古谷　稔
高木　厚人　河内　利治（君平）　河野　隆（鷹之）

（7）オリエンテーション合宿

新入生が一日も早く大学生活に順応できることを援助し、教職員と学生および学生相互の親睦を図り、書道学科の一員としての志向と気概を持つことを促すため、書道学科では、学内での教務課、学生課、就職課、体育、教職、国際交流センター、留学生、図書館といったガイダンスとは別に、一泊二日のオリエンテーション合宿を実施している。本年度（二〇〇〇年）は、代々木オリンピック公園内の「国立オリンピック記念青少年センター」において、四月二二日（土）一三時から二三日（日）一一時までの日時で実施した。

初日は、ABの二クラスに分かれ、自己紹介、グループディスカッション、質疑応答を行い、学生生活の仕方や履修登録・時間割作成などを指導した。夕食後は、昨年度退官された東山一郎名誉教授と、本年度四国大学に移られた久米公元教授の両先生から、書道学科新入生への温かい励ましのお言葉を頂戴した。

二日目は、スポーツ棟第一体育館で、河野先生の号令の下、準備体操をしてから全員で「大縄跳び大会」を行い、解散した。（現在、大学ホームページ掲載の写真は、この「縄跳び」後の集合写真である。アドレス：www.daito.ac.jp/gakubu/bungaku/shodo/index.html）なお、全員の自画像プロフィール入り「教員学生名簿」を手作りして配付した。

（8）課外授業

書道学科では授業とは別に、二〇〇〇年度は「課外セミナー」「課外研修」「学外見学会」「新入生歓迎書道展指導会・選別会」を実施した。

①「課外セミナー」

学生からの要望に応える形で、自発的に行うようになったものである。このセミナーは、授業終了後の時間を活用して行った。そのため学生の中には、東松山キャンパスの授業終了後、板橋キャンパスに移動して参加するというハードスケジュールをこなした者もいた。次の三つのセミナーが開講された。担当講師と内容・日時を記す。

東松山キャンパス　1号館3階136教室　五時限目

〈漢字・かな・漢字仮名交じりの書セミナー〉

田中裕昭　漢字作品の表現と鑑賞1　一〇月一一日（水）
漢字作品の表現と鑑賞2　一一月　八日（水）
新井儀平　漢字作品と表現1　一〇月一八日（水）
漢字作品と表現2　一二月　六日（水）
清水治夫　仮名作品制作1（半切）　一〇月二四日（火）
仮名作品制作2（半切）　一〇月三一日（火）
野口林造　漢字仮名交じりの書1　一〇月一〇日（火）
漢字仮名交じりの書2　一一月二八日（火）
田中　有　臨書から創作へ　一二月二〇日（水）

板橋キャンパス

〈篆刻学習セミナー〉1号館6階4番教室

河野　隆　自用印の制作

1　九　月二二日（金・一八時三〇分～二〇時）
2　一〇月一三日（同）
3　一〇月二〇日（同）
4　一一月一〇日（同）
5　一一月二四日（同）
6　一二月　八日（同）
7　一　月二六日（同・一〇時～一七時）

〈漢文・中国語セミナー〉1号館6階1601教室

河内利治　武蔵野書院刊『漢文学び方の基礎』をテキストにして、漢文の基礎を練習問題によって勉強。留学生も参加したことから、時折中国語を交えて説明。

1　九　月二九日（金・一八時三〇分～二〇時）
2　一〇月　六日（同）

3　一〇月二七日（同）
4　一一月一七日（同）
5　一二月　一日（同）
6　一二月一五日（同）
7　一　月三一日（水・一〇時～一七時）

この他、高木厚人が毎週金曜日に〈仮名セミナー〉を他学科の学生を対象に指導している。

②「課外研修」

これも学生からの要望に応える形で、自発的に行ったものである。特に「先生方全員の書いているところを見たい」との要望が強く、学生は夏休みの期間を利用して、三日間毎日、板橋キャンパスに通い、先生方の揮毫、裏打ち実演の指導や、先生方が過去に書かれた作品及び収蔵品を鑑賞した。当初は合宿をという案もあったが、日時や経費を考慮して、いわば「通い合宿」「学内合宿」という形で行った。

③「学外見学会」

これまた学生からの要望に答える形で、自発的に行ったものである。古谷稔、河野隆両先生が実施。

古谷稔

書道学科一年生有志二三名が参加。実施日は一一月二三日（木）。三井文庫の《三井文庫別館会館十五周年記念展「三井の名宝」》において、「高野切一種」「寸松庵色紙」「古林清茂墨跡」など古筆・墨跡、能面・陶磁などを鑑賞。東京国立博物館本館一九室（鎌倉時代から江戸時代まで）および二〇室（奈良時代から江戸時代までの、写経・文書・古筆・懐紙・書状などの各種の書跡）の常設展示において、日本書道史の主要な遺品を一望し、それぞれの美を鑑賞。なお両館の「鑑賞のしおり」を先生が作成され、学生に配付して参考に供した。

河野隆

書道学科一年生及び日本文学科・中国文学科三、四年生有志一〇名が参加。実施日は四月二九日（土）。銀座ロイヤルサロンで開催された《榴社篆刻展》及び特別陳列の《二世中村蘭台刻老子語印五十顆》を参観。事前の「金石学」の授業において、三回に亘り蘭台の代表作と印跋を鑑賞、解説し、実施見学に臨んだ。

書道学科一年生及び日本文学科・中国文学科三、四年生有志九名が参加。実施日は一〇月二九日（日）。古河篆刻美術館の《保多孝三展》を参観。その後、隣接の美術学習室で「初世中村蘭台刻十二面印」と、古銅印譜の名品『齊魯古印攈』一帙四冊を手に取って鑑賞。

④「新入生歓迎書道展指導会・選別会」

二〇〇一年四月三日から一四日には、書道学科新二年生の作品を中心とした書道学科主催「新入生歓迎書道展」の実施を予定している。その制作に向けて、学生の要望により、指導会と選別会を実施した。実施日時は次の通り。

1　二月　三日（土）一四時～一七時　板橋キャンパス　指導者：田中有・清水・河野・河内
2　二月一〇日（土）一四時～一七時　板橋キャンパス　指導者：田中裕・野口・高木・河野・河内
3　二月二三日（金）一八時～二〇時　板橋キャンパス　指導者：高木・河内
4　三月一二日（月）一三時～一四時　板橋キャンパス　選別者：新井・野口

七　書道学会

書道学会主催行事として、本年度（二〇〇〇年）は書道学会設立総会と書道学科開設「特別記念講演会」および日帰りバス「研修旅行」を行った。（本学会の会則・組織などについては巻末を参照されたい。）

「特別記念講演会」（春季講演会）

講　師　今井　潤一（凌雪）
演　題　大東の書道に期待するもの
日　時　六月一〇日（土）一三時半～一五時
場　所　板橋校舎　一―一〇六教室
参加者　一三〇名（書道学科一年生・他学科学生・本学ＯＢなど）
付　記　詳細な講演内容が本誌に掲載されているのでご一読願いたい。

「研修旅行」（秋季見学会）

日　時　　一一月一二日（日）八時～二〇時半

場所・内容　山梨県　市川大門碑林公園碑の見学と採拓実習

西島町紙漉き工場　西伝製紙（笠井武氏）見学と実習

硯製作所　溪雲硯工房（望月賢三氏）見学のみ

参加者　教職員九名・学生四七名（書道学科一年生）

付　記　積極的かつ有効的に「碑林」全一四碑を鑑賞するため、田中有教授の指導の下、事前に調査分担グループごとに一碑を割り当て、学生全員によるポケット版「大門碑林資料」冊子を作成した。

八　書道研究所

（1）理念と目的

書道研究所が「大東文化大学学則」第六条の二によって、大学附属機関として設置されたのは、一九八八年（昭和六三）四月のことであり、創設以来今日まで一三年を経過したことになる。

しかしながら、書道研究所の淵源は、一九六九年（昭和四四）四月に開設された「書道文化センター」にまで遡ることができ、いわば本学と書道における独自の研究機関としての性格を有すると言える。書道研究所は、その前身である書道文化センターの理念と目的、業務を継承しつつ、書道の研究教育と附属業務を両立させることを前提とし、運営にあたってきた。この理念と目的は、「書道研究所規程」第二条（目的）、第三条（業務）に掲げてある。

第二条　研究所は、書に関する研究調査及びこれに関する諸事業を行い、書芸術ならびに書教育の高揚発展に寄与することを目的とする。

第三条　研究所は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

一　調査・研究の実施並びにその成果の発表及び出版

二　資料の収集・整理及び保管

三　講演会・講習会及び展覧会等の開催

四　書教育に関する指導及び助成

五　調査・研究の受諾及び指導

六　書に関する社会事業への協力

七　その他前条の目的を達成するために必要な事項

書道研究所は、学内教育組織への側面的協力を行っている。これを単に研究所事業範囲に止まらず、本学の書道全体をどうすべきか、その中で研究所はどのような役割を果たすべきかを、管理委員会を中心に討議を重ねてきた。その結果、研究組織も整い附属事業も今日的な方向へと進み実施している。しかし、

i　大学を巡る諸情勢の変化に対応する対応

ii　研究環境の整備

iii　学内・学外教育組織への協力

などの遅れがある。なお、全学関係の研究者の協力で、書道研究所にふさわしい共同研究の充実を図り、国際的にも通用する書道文化が要請されている。したがって今日的研究課題は、これらの問題とも適応していく方途を模索するとともに、新しく生じつつある事象を正確に認識分析し、総合的かつ長期的に見据えなくてはならない。

（2）研究成果と事業実績

以上のことを踏まえて、書道研究所は目的達成のために、種々の事業・研究を行ってきている。研究成果としては、研究誌『大東書道研究』刊行、事業実績としては、月刊誌『大東書道』刊行、青山・宇野両文庫の整理及び保管、展覧会、講習会を挙げることができる。

1　研究成果

①研究誌『大東書道研究』

書道研究所研究員（専任・兼担・兼任・客員）の研究成果として刊行しているもので、一九九三年（平成五）より発刊した。これは、作品制作と研究論文の双方からなる。歴代の書道研究所所長は次の方々である。

歴代所長	今井　潤一（凌雪）	一九八八年四月～一九九一年三月
	東山　一郎	一九九一年四月～一九九六年三月
	村上　列（翠亭）	一九九六年四月～一九九八年三月

久米　公（東邨）　一九九八年四月～二〇〇〇年三月
新井　儀平（光風）　二〇〇〇年四月～

二〇〇〇年（平成一二）度の研究員は以下の方々である。

専任研究員　無

兼担研究員　田中　裕昭（節山）　書道学科教授
新井　儀平（光風）　書道学科教授
清水　治夫（透石）　書道学科教授
野口　林造（白汀）　書道学科教授
田中　有（東竹）　書道学科教授
古谷　稔　書道学科教授
高木　厚人　書道学科助教授
河内　利治（君平）　書道学科助教授
河野　隆（鷹之）　書道学科専任講師

兼任研究員　村上　列（翠亭）　元教育学科教授・元筑波大学教授
東山　一郎　元教育学科教授・名誉教授
飯山　正雄（素木）　書壇院理事
澤田　雅弘　群馬大学教授・中国文学科講師
菅原　一廣（石廬）　元教育学科講師
鈴木　慶子　長崎大学助教授・元教育学科講師
髙城　弘一（竹苞）　國學院大学助教授・元専任研究員
玉村　清司（霽山）　教育学科講師
小林　強　龍谷大学仏教研究所客員研究員
大橋　修一　埼玉大学教授・中国文学科講師

客員研究員　名児耶　明　五島美術館学芸部長
福田　行雄　古筆・料紙研究家

松村　一徳　　篆刻美術館館長
遠藤　昌弘　　駒沢女子大学講師
綿引　浩一（滔天）　篆刻研究家

次に、既刊『大東書道研究』に収録される制作作品及び研究論文目録を掲げる。

【大東書道研究1】一九九三年八月一〇日発行

書道研究所の素顔を　研究所所長　東山　一郎
制作作品「芭蕉の句」　兼担研究員　東山　一郎
同　「やまとくにはら」　兼担研究員　村上　翠亭
同　「客至」　兼担研究員　野口　白汀
同　「人心険於山川」　兼担研究員　田中　節山
同　「歩虚聲」　兼担研究員　新井　光風
かな古典臨書講座―関戸本古今集―　兼担研究員　東山　一郎
継色紙雑考　兼担研究員　村上　列（翠亭）
秦漢文字字形考　兼担研究員　新井　儀平（光風）
詛楚文字系（1）　兼任研究員　伏見　冲敬
新出土とその周辺　兼任研究員　西林　昭一

【大東書道研究2】一九九五年三月一〇日発行

制作作品「道元の歌」　兼担研究員　東山　一郎
同　「平安」　兼担研究員　村上　翠亭
同　「雪月花」　兼担研究員　古川　悟
同　「静中」　兼担研究員　野口　白汀
同　「天壽無極」　兼担研究員　田中　節山
同　「聞雷」　兼担研究員　新井　光風

かなの基本点画　兼担研究員　東山　一郎
ラジオ放送とかな書道―ＮＨＫラジオ出演記―　兼担研究員　村上　列（翠亭）
戦国・包山楚簡―篆書中に見える忽卒の文字を中心として―　兼担研究員　新井　儀平（光風）
戦国璽秦印に見る仮借字について　兼任研究員　菅原　一廣（石廬）
『隷辨』と『隷法彙纂』　兼任研究員　田中　有（東竹）
集帖に見る石菴の臨羲之帖―石菴ノート―　兼任研究員　玉村　清司（霽山）
予楽院・近衛家熙の書業（一）―空海筆崔子玉座右銘の写し（双鉤塡墨）について―　専任研究員　髙城　弘一（竹苞）

【大東書道研究3】一九九六年三月一〇日発行

制作作品「万葉歌」　兼担研究員　東山　一郎
同　「清少と行成」　兼担研究員　村上　翠亭
同　「婦縷加和左徒流」　兼担研究員　古川　悟
同　「得魚」　兼担研究員　野口　白汀
同　「墨魔人」　兼担研究員　田中　節山
同　「雲龍風虎」　兼担研究員　新井　光風
線について　兼担研究員　東山　一郎
予楽院・近衛家熙の書業（二）―屏風土台写巻物について―　兼担研究員　村上　列（翠亭）
秦漢文字字形考Ⅱ　兼担研究員　新井　儀平（光風）
西漢の蛇紐印（田字格）についての考察　兼任研究員　菅原　一廣（石廬）
鶺鴒頌について　客員研究員　富田　淳
予楽院・近衛家熙の書業（三）―「高野切本古今集」散逸断簡の写しについて―　専任研究員　髙城　弘一（竹苞）

【大東書道研究4】一九九七年三月一〇日発行

制作作品「いひおほせて何かある（去来抄）」　兼担研究員　村上　翠亭
同　「万葉歌」　兼担研究員　東山　一郎
同　「飛花」　兼担研究員　古川　悟
同　「積雨輞川荘作」　兼担研究員　野口　白汀
同　「駐魂」　兼担研究員　田中　節山
同　「鱗虫」　兼担研究員　新井　光風
抹消された『高野切』　兼担研究員　村上　列（翠亭）
針切―臨書から倣書への導入―　兼担研究員　東山　一郎
秦漢文字字形考Ⅲ　兼担研究員　新井　儀平（光風）
近五年簡牘帛書研究文献資料　兼任研究員　田中　有（東竹）
予楽院・近衛家熙の書業（五）―「巻子本古今集切」の臨模本について―　兼任研究員　髙城　弘一（竹苞）
近代学校における毛筆用教科書手本集成〈1〉　専任研究員　久米　公（東邨）

【大東書道研究5】一九九七年一二月二〇日発行

制作作品「かげひなた（山頭火句）」　兼担研究員　村上　翠亭
同　「子規の句」　兼担研究員　東山　一郎
同　「後世可畏」　兼担研究員　古川　悟
同　「山居秋暝」　兼担研究員　野口　白汀
同　「曠適」　兼担研究員　田中　節山
同　「辰徳」　兼担研究員　新井　光風
鄭道昭摩崖書の研究　兼担研究員　野口　林造（白汀）
秦漢文字字形考Ⅳ　兼担研究員　新井　儀平（光風）
『劉石庵法書』にみる臨書の一考察　兼任研究員　玉村　清司（霽山）
有紀年画像石題記―補遺　兼任研究員　西林　昭一

近五年簡牘帛書研究文献資料・続補　兼任研究員　田中　有（東竹）
予楽院・近衛家熙の書業（八）―「近衛本和漢朗詠集」の写し（陽明文庫本・三井文庫本）について―
兼担研究員　村上　列（翠亭）
「小島切斎宮女御集」諸断簡配列考（上）　兼任研究員　髙城　弘一（竹苞）
かなの基本形について（Ⅰ）　兼担研究員　東山　一郎
ペン字書の実験　兼任研究員　飯山三九郎（素木）
「コトバノオケイコ」から「かきかた」へ―最後の国定本書き方手本に見る文字教育観―
兼任研究員　鈴木　慶子

【大東書道研究6】一九九八年三月二〇日発行
制作作品「尾上柴舟歌」　兼担研究員　東山　一郎
同　「開口笑」　兼担研究員　古川　悟
同　「山林遊　杜甫」　兼担研究員　野口　白汀
同　「探虎穴」　兼担研究員　田中　節山
同　「仁徳」　兼担研究員　新井　光風
鄭道昭摩崖書風研究　兼担研究員　野口　林造（白汀）
秦漢文字字形考Ⅴ　兼担研究員　新井　儀平（光風）
俳人井月の書の渕源　兼担研究員　田中　裕昭（節山）
唐・鄭高関係三墓誌と崔章の書法（1）　兼任研究員　飯山三九郎（素木）
『中国璽印集粋』に見る諸官印概説　兼任研究員　菅原　一廣（石廬）
「小島切斎宮女御集」諸断簡配列考（下）　兼任研究員　髙城　弘一（竹苞）
近代学校における毛筆用教科書手本集成〈2〉　専任研究員　久米　公（東邨）

【大東書道研究7】一九九九年三月二〇日発行
制作作品「万葉歌」　兼担研究員　東山　一郎

同　「槐安國語」　兼担研究員　野口　白汀
同　「ともし火」　兼担研究員　清水　透石
同　「雷神」　兼担研究員　新井　光風
同　「方慎」　兼担研究員　田中　節山
同　「百年書法裏萬時酒盃中」〈白文〉・「齊軌」〈朱文〉　兼担研究員　河野　隆（鷹之）
北魏墓誌の鐫刻について　兼任研究員　澤田　雅弘
熊秉明著『中国書法理論体系』1　兼任研究員　河内　利治（君平）
鄧石如（有紀年）作品目録　兼任研究員　遠藤　昌弘
伝東素冊筆編者未詳『勅撰和歌抄』切に関する基礎的考察—付、『別本和歌秋風抄』の古筆切について—　兼任研究員　小林　強
書と音楽のコラボレーション—リアリティな書表現への提言—　兼任研究員　斎藤　公男（蒼青）
『ちらき』私考—本阿弥切「物名」の釈文について—　兼担研究員　村上　列（翠亭）
古筆料紙「雲紙」に見る雲形考　兼任研究員　髙城　弘一（竹苞）
かなの基本形について（Ⅱ　兼担研究員　東山一郎・兼任研究員　岩井　秀樹
書写教育史にみる書写力の日常化の問題について—硬筆「書キ方」導入をめぐる動きから—　兼任研究員　樋口　咲子

【大東書道研究8】二〇〇〇年三月二〇日発行

制作作品「生命のあかし」　兼担研究員　田中　裕昭（節山）
同　「淵燈」　兼担研究員　野口　林造（白汀）
同　「後漢書・爰延傳」　兼担研究員　新井　儀平（光風）
同　「良寛の歌」　兼担研究員　清水　治夫（透石）
同　「野ざらし（芭蕉句）」　兼担研究員　高木　厚人
同　蘇東坡句「我書意造本無法」　兼担研究員　河野　隆（鷹之）
秦漢文字字形考Ⅵ　兼担研究員　新井　儀平（光風）
辺款の採拓法（訳注「拓辺款四十字訣」）　兼担研究員　河野　隆（鷹之）

徳林・傅以礼と趙之謙―趙之謙研究札記（一）―　兼任研究員　澤田　雅弘
熊秉明著『中国書法理論体系』2　兼任研究員　河内　利治（君平）
古筆料紙切に見る虫損の重要性―架蔵の古筆切を中心に―　兼任研究員　髙城　弘一（竹苞）
連歌寄合書関係の古筆切資料覚書　兼任研究員　小林　強
鄧石如書法作品における款印と使用時期の変遷について　客員研究員　遠藤　昌弘
徳川美術館蔵『齋宮女御集』と梅澤記念館蔵『齋宮女御集』との比較研究―両本の書写年代と筆者について
客員研究員　加藤　敏明

②書道教材ビデオ作成

一九九二年（平成四）に、『高等学校芸術科書道教材ビデオ』全五巻を企画・監修し、㈱二玄社より発刊した。五本シリーズのシナリオは、各々の書体を専門とする本学書道教員が担当した。ビデオタイトルは次の通り。

〈1〉楷書の歴史と書法Ⅰ
〈2〉楷書の歴史と書法Ⅱ
〈3〉行書の歴史と書法
〈4〉草書の歴史と書法
〈5〉かなの歴史と書法

幸いにも同ビデオ五巻すべてが文部省選定をいただき、日本視聴覚教育協会主催、文部省・ＮＨＫ・朝日新聞社後援の「一九九二年優秀映像教材選奨」のビデオ部門で、〈1〉が最優秀作品賞・文部大臣賞、〈3〉が優秀作品賞・日本視聴覚教育協会会長賞に選ばれた。このビデオは今日の教育書道界の現場でも高い評価を得ている。

2　事業実績

①月刊誌『大東書道』

前身の書道文化センター開設早々の一九六九年（昭和四四）一〇月、月刊書道誌として創刊。当時の書道雑誌の多くが営利の目的のために、安易に級位認定を行っていることに危機感を覚えた青山杉雨所長の発案で、これに警鐘を鳴らし、権威ある厳格な級位の認定を目的として発刊されたものである。創刊時点で会員数五、〇〇〇名という順調なスタートをきり、二〇〇〇年一

二月号で、通巻三八二号を発刊した。掲載の手本は全国の著名な書家に、また文章は有名な研究者に依頼してきており、その数は百余人にのぼっている。

②資料の収集・整理及び保管

書道資料室から書道資料館に向けて整備しつつある現状である。

旧書道文化センター時代から、継続的に収集してきた書道関係図書は、二〇〇〇年度で約六、四〇〇件余になった。今後も拡充に努めていく。これは研究所の調査・研究および大学の講座のための教材、資料として、便宜を供している。

一方、一九九五年（平成七）、元本学教授・元書道文化センター所長の青山杉雨先生のご遺族から、先生が生前収集された貴重な書道関係の資料・書籍、一、〇〇〇余件の寄贈を受けた。また、元本学教授の宇野雪村先生のご遺族からも、先生が生前に収集された原拓本を中心とする書道関係の資料、二、〇〇〇余件の寄贈を受けた。この貴重な両寄贈資料を「青山文庫」、「宇野文庫」とし、目下整理中である。将来的には、対外的にも開放できるよう、データ―ベース化に着手し、収蔵資料の検索システムを構築中である。

③展覧会

展覧会は「大東文化大学主催全国書道展」を一九五九年（昭和三四年）から開催し、全国各地から一般、学生（小学校・中学校・高等学校・大学）の応募があり、本年二〇〇〇年度で第四二回を迎え、応募点数は約二五、三〇三点を数える。これを審査される先生方は、中央審査員二五名、地区審査員一七五名の計二〇〇名からなる。本年度の入選・入賞点数は左記の通りである。

文部大臣賞	四点
郵政大臣賞	四点
東京都知事賞	四点
大東文化大学学長賞	一五点
全国書道高等学校協議会賞	二六点
大東文化学園理事長賞	二八点
書道研究所所長賞	四四点
大東書道大賞	六二点

推薦賞　六〇〇点
特選　三、〇一二点
金賞　五、七一二点
銀賞　九、六三八点
銅賞　六、一五四点
応募作品総点数　二五、三〇三点
総搬入件数　五二八件

今回の「第四二回全国書道展」は、一一月二五日・二六日の両日、板橋校舎特設展示会場において開催され、また二六日は右記の入賞者の表彰式と、関係者による記念パーティーが催された。

④講習会

講習会は現在二つを実施している。長く継続している「大東文化大学書道講習会」と、近年スタートした「高校生のための書道講座」である。本年度は、左記の通り実施した。

「第三一回大東文化大学書道講習会」

1　仮名料紙製作・古式冊子装丁コース

［講　演］「料紙の歴史―仮名書道と料紙―」　村上翠亭
［製作講師］村上翠亭・髙城竹苞
［内　容］染紙製作・から紙製作・粘葉装冊子装丁実習中心
［会　期］八月二六日・二七日　一〇時から一七時

2　篆刻コース

［講　演］「篆刻とは―書作品における落款印の用法について」　河野隆
［実習講師］河野隆・綿引滔天
［内　容］二日間で自用印（姓名印・雅号印・遊印等）の完成を目標
［会　期］九月二日・三日　一〇時から一七時

3　漢字コース

［講　　演］「二十世紀の中国書法」　河内君平

［実技講師］新井光風・田中節山・野口白汀・田中東竹・斎藤蒼青

［内　　容］楷・行草・隷・篆書の各書体について、半紙・条幅の形式を通して、基本的な作品の作り方を学ぶ。

［会　　期］九月九日・一〇日　一〇時から一七時

4　仮名コース

［講　　演］「寸松庵色紙について」　古谷稔

［実技講師］清水透石・東山一郎・高木厚人・土橋靖子

［内　　容］初・中級と上級の二コースに分け古筆の臨書学習や小字の散らし書き・大字条幅の実習を体験する。

［会　　期］九月一六日・一七日　一〇時から一七時

「高校生のための書道講座」

［要　　項］大学開放の一環として、本学書道研究所では、現役高校二・三年生を対象とした漢字・仮名の書道講座を実施します。本講座は臨書・創作について書法上の基本的な技法を、本学書道学科教授陣が懇切丁寧に講述指導するものです。受講料は無料。

［内　　容］①漢字クラス―臨書（楷書、行・草書）・創作を中心とした半紙作品の作り方を指導する。
②仮名クラス―臨書（古筆中心）・創作を中心とした半紙作品の作り方を指導する。

［講　　演］「日本の書の美再発見」　古谷稔

［教　　員］漢字クラス　田中裕昭・新井儀平・野口林造・田中有・河内利治・河野隆・斎藤公男・大島守彦
仮名クラス　清水治夫・高木厚人

［会　　期］七月二九日　九時半から一七時　七月三〇日　一〇時から一五時半

［参加人数］合計　二二九名　（漢字クラス二一〇名・仮名クラス一九名）

⑤　講演会

必ずしも頻繁に行ってはいないが、中国著名な韓天衡先生（一九四〇年、上海生まれ、上海中国画院副院長）を招聘し、一九

九六年（平成八）一二月一五日に「書道講演会」を行ったことがある。当時の村上列所長は次のように「ごあいさつ」に述べている。

このたび本学に韓天衡先生をお迎えすることができましたことは我々の大きな喜びであります。書画印三絶の芸術家であられます韓天衡先生のご高名は、東洋芸術に関心をもつ人々には改めて言うまでもないことでしょう。書道研究所も創設八年目を迎え、大学附置研究所として社会に貢献すべき方策を探る中でこの講演会を企画しましたものの、これがほんとうに実現できるのかと不安を持ちながらのスタートでありました。先生はご多忙の身であられますのに、我々のお願いをご快諾いただき、今日この日を迎えた次第であります。はるばる本学までお越しいただきました韓天衡先生に主催者といたしまして衷心より厚くお礼申し上げますとともに、この講演会が日中文化交流の新たな一ページとなりますようにと願ってやみません。

当日は、次の二部構成で韓天衡先生の講演ならびに実演が行われた。

第一部　講演「私の書画印三絶の世界」　第二部　画・印技法実演

九　書道部

（1）大東の書道部

現在の書道部の前身は、大東文化学院の九段時代である。「茎墨会」が古典を中心とした研究を行った。当時の学生では上條信山（高一六期）が特筆される。

戦後、新生の書道部が結成され、昭和二〇年代後半から三〇年代前半にかけて、大久保達正（昭和二九年卒）、西林昭一・佐々木折柴・林蕉園（昭和三〇年卒）、足立豊・貝原司研（昭和三三年卒）らが活躍した。

ついで一九五九年（昭和三四）から一九六三年（昭和三八）にかけて、本学の書道発展に貢献した永井暁舟（大八期）、および加藤子華・高田墨山・鈴木啓司（大八期）、宮本沙海・現中国文学科主任萩庭勇（大九期）、田中節山・玉村霽山（大一〇期）、斎藤蒼青（大一一期）らが活動した。

一九五八年（昭和三三）に「関東大学書道連盟」が結成されると、その活動の中心になり、一九五九年（昭和三四）には「全国書道展」を大東書道部が実施し、出品数一七、〇〇〇点という快挙であった。この「全国書道展」はその後、大東文化大学書道研究所が主催になり、今日に至っている。また近年盛会である「合宿錬成会」もこの年、二三名の部員により初めて長野で開

催した。

一九六七年（昭和四二）に東松山校舎が開校し、教養課程が新設されると、学生数が急増し、書道部員五〇〇余名というピークを迎えた。班活動を中心として、「校外展」「研修会」「互評会」など盛んに活動した。当時、展覧会出品希望者は、教授陣の厳正な指導を受け、予選を経てから出品するという情況であった。また「合宿練成会」は、二〇〇余名にのぼる参加者があり、会場探しに苦労するありさまであった。

一九八三年（昭和五八）には「大東文化大学創立六十周年記念」として「大東文化大学書法展」が北京と上海で開催された。教授陣、書道部ＯＢ、書道部現役代表の作品を展示し、併せて出品者が中国を訪問して交流し、中国にも大東文化大学の書道の名を広めた。

その後、受験戦争の激しい時代に入り、大東への入学志願者が急増した。それにつれて書道志向の学生への入学にも影響が出て、部員数も一時、八〇余名にまで減少した。

しかし近数年来、入試科目に書道を入れた新しい入試制度を、日本文学科・中国文学科が採用し、書道を希望する学生の入学が再び盛況を呈し、現在では一六〇余名を超えている。活躍も多方面に亘り、書道学科からの入部者もおり、活況を見せている。

今日、大東書道の名が全国に轟いているが、これは大学における学習の積み重ねの上に、卒業後も研鑽を重ね、全国各地の教育現場の第一線で活躍する書道部ＯＢの存在によるところが大きい。また各都道府県で指導的立場におり、全国規模の研究会で率先して報告する者も多く、日展をはじめとする中央の書壇において活躍している書家も多い。その一方で、ＯＢ諸兄は続々と母校大東文化大学に進学するよう指導している。

（2）現書道部の活動

二〇〇〇年（平成一二）度の書道部の活動内容を列記する。現在、部員総数は一六三名（一年三六名・二年四九名・三年三九名・四年三九名）である。部活動は、班別活動と全体活動に大別できる。

Ⅰ　班

①班別活動

書体を四種に分け、各班、書体ごとに好きな古典を一つ選び、その古典を三回に分けて取り組む。まず一回目で調べたことを基に班内で発表し、二回目で先生に講演していただき、最後にまとめとして臨書を行っている。

1楷書（六月実施）講師　河内君平

古典　雁塔聖教序・牛橛像像記・皇甫誕碑・孔子廟堂碑・蘇慈墓誌銘・張猛龍碑・九成宮醴泉銘

2行草書（六月実施）講師　斎藤蒼青

古典　書譜・苕溪詩巻・松風閣詩巻・王鐸行書五言律・呉昌碩行草書幅・喪乱帖・蘭亭叙

3篆・隷書（一〇月実施）講師　新井光風

古典　趙之謙崔子玉座右銘・石鼓文・趙之謙三略八屏・礼器碑・曹全碑・乙瑛碑・大盂鼎

4仮名（一一月実施）講師　古谷稔

古筆　高野切第一種・升色紙・粘葉本和漢朗詠集・本阿弥切・関戸本古今集・寸松庵色紙・針切

②研究発表会（七月・一二月実施）

前、後期に一回ずつ班別活動で学んだことを、各班工夫を凝らし全体の場で発表する。

Ⅱ　全体

①講習会・講演会

1篆刻講習会（四・五月実施）講師　河野隆・権田逸盧

内容　全三回の講習を通して基本的な篆刻の知識と印の制作過程を修得し、実際に自分の印を刻る。

2小作品講習会（六月実施）

学生を講師に、小作品として絵手紙を書くことで、身近なところから書を取り入れる。

3和紙作り講習会（一〇月実施）

内容　小川町伝統工芸会館で、実際に和紙作りを体験。

4調和体講習会（一〇月実施）講師　永守蒼穹

内容　学生と先生を講師として招き、二回に分けて調和体を書くことで、書に対する視野を広めている。

5裏打ち講習会（一〇月実施）

内容　学生を講師とし、実際に裏打ちを体験。

6拓本採り講習会（一一月実施）

内容　学内で学生を講師に、基本的知識や拓本の採り方を学ぶ。その後、日暮里「全生庵」で採拓。

7文房四宝講習会（五月実施）講師　大橋修一

内容　基本的な文房四宝の知識を知り、普段目にすることのできない名品を鑑賞する。

②互評鑑賞会（各展覧会前に三回実施）・席書会（五月・八月・九月・一一月実施）

内容　部員同士で錬成や鑑賞・批評することで、互いに刺激を受け、作品制作に生かしている。

③展覧会活動

1新入生歓迎展（五月実施）

場所　東松山校舎一号館四階コミュニティーギャラリー

内容　新入生を歓迎することを目的とし、作品の陳列を行う。

2臨書展（六月実施）

場所　ギャラリー東松山

内容　個人の捉える古典の臨書というものを校内外に向けて発表している。

3校内展（一一月実施）

場所　板橋校舎一号館六階書道教室

内容　学園祭期間中に書道部の活動成果を校内外に向けて発表している。

4校外展（二月実施）

場所　池袋サンシャインシティーワールドインポートマート四階

内容　一年間の書道部の活動成果として、校内外へ向けて発表する。

④合宿錬成会（九月実施）講師　斎藤蒼青・河野隆・高木厚人

場所　群馬・尾瀬ストラーセ

内容　夏季休暇を利用して一週間合宿錬成を行い、半切自由臨書・半切規定創作・条幅自由・班別合作・作品交換会・余興・コンパ等を行い、合宿中に自己の確立に努め、普段の活動では得られないものを得ている。

⑤合同席書会（六月実施）

内容　他大学の学生との錬成により、刺激を受け合い、見聞を広め、書を通じての交流を深める。

本年―国士舘大学・拓殖大学

昨年―東京学芸大学・帝京大学・立正大学

⑥総会・会合

1定例総会（年四回実施）

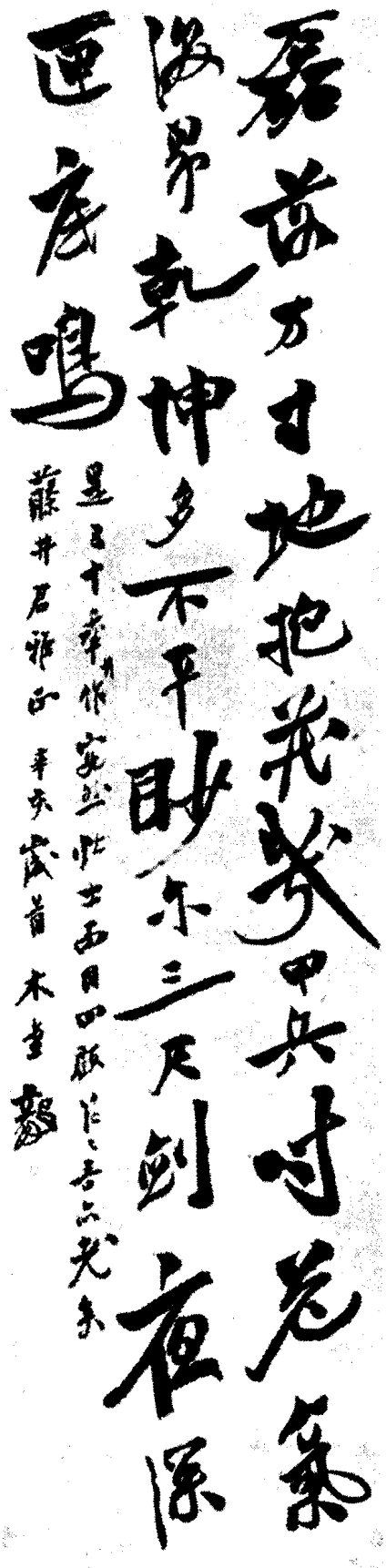
2 執行部会（年八回実施）
3 役員会（月一回実施）
4 班長会（班別活動毎実施）

⑦レクリエーション・コンパ・朋友会

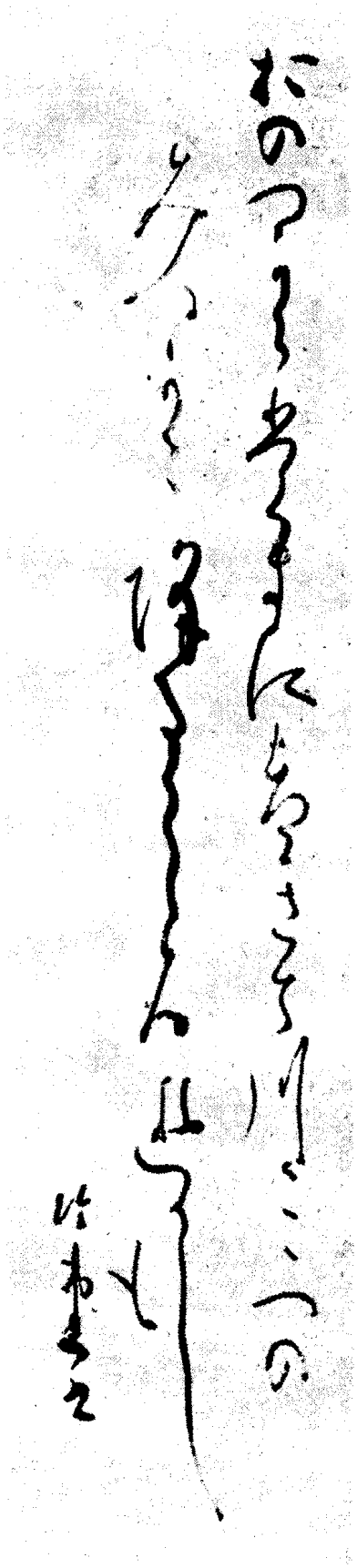
書活動から離れたところでの部員同士の親睦を深めることを目的として行う。

Ⅲ 冊子「活鱗」発行（全九冊）

部活内で活動の記録として冊子「活鱗」を制作しており、活動報告や班別活動においての臨書作品、展覧会情報などを載せている。展覧会の際には「活鱗」を陳列、配布し、外部の方にも書道部の活動を知っていただけるように努めている。



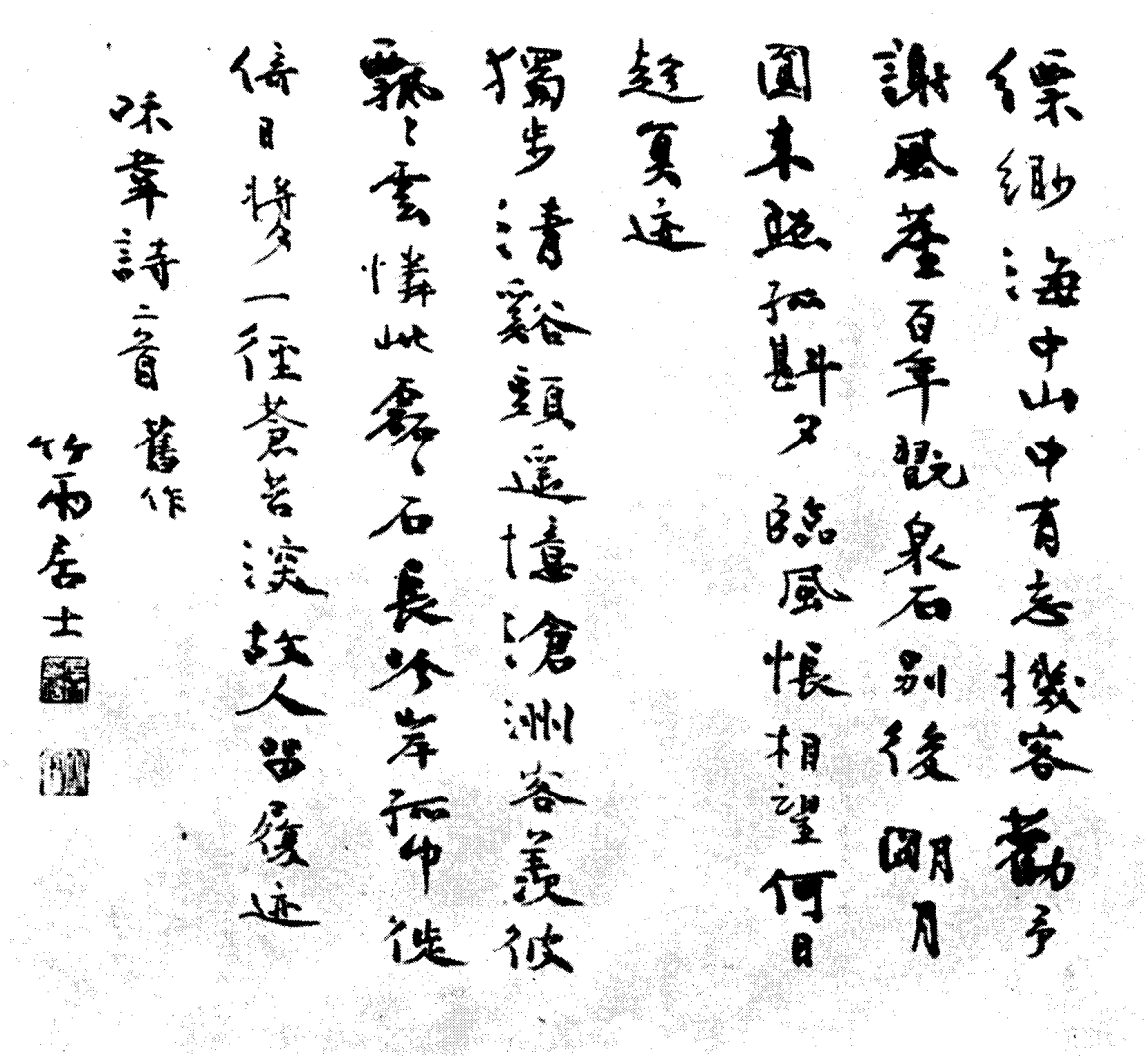
犬養木堂



高塚竹堂

雖隨居
詠士

宮島詠士


倏緲海中山中有志機客勸予
謝屋百年甃泉石別後明月
圓未期孤斟夕臨風悵相望何日
趍冥迹
獨步清谿頭遥憶滄洲客羨彼
飛雲情此霧石長吟岸孤仲徙
倚日將夕一徑蒼苔深故人留復迹
味韋詩二首 舊作
竹雨居士

土屋竹雨

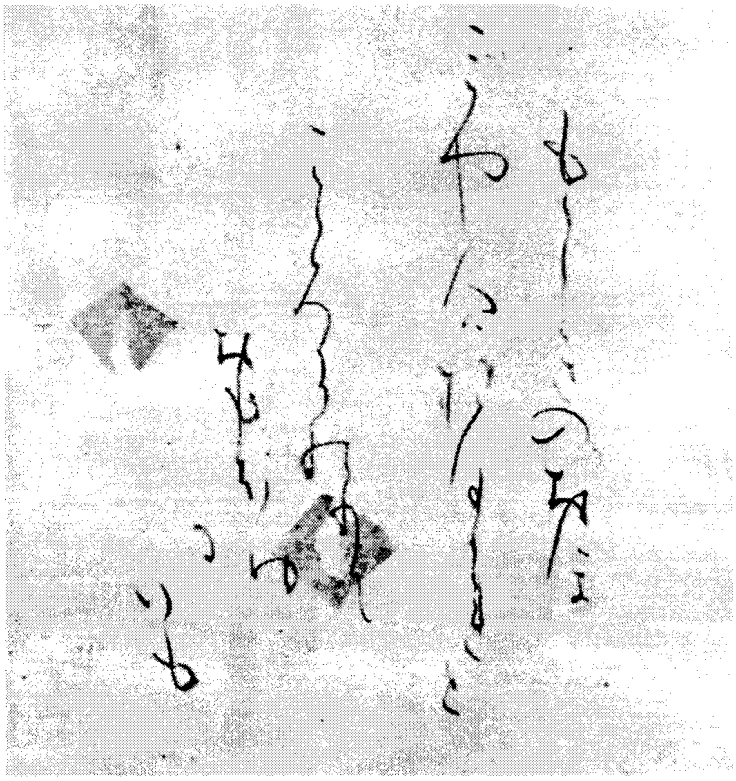
山崎節堂

松井如流

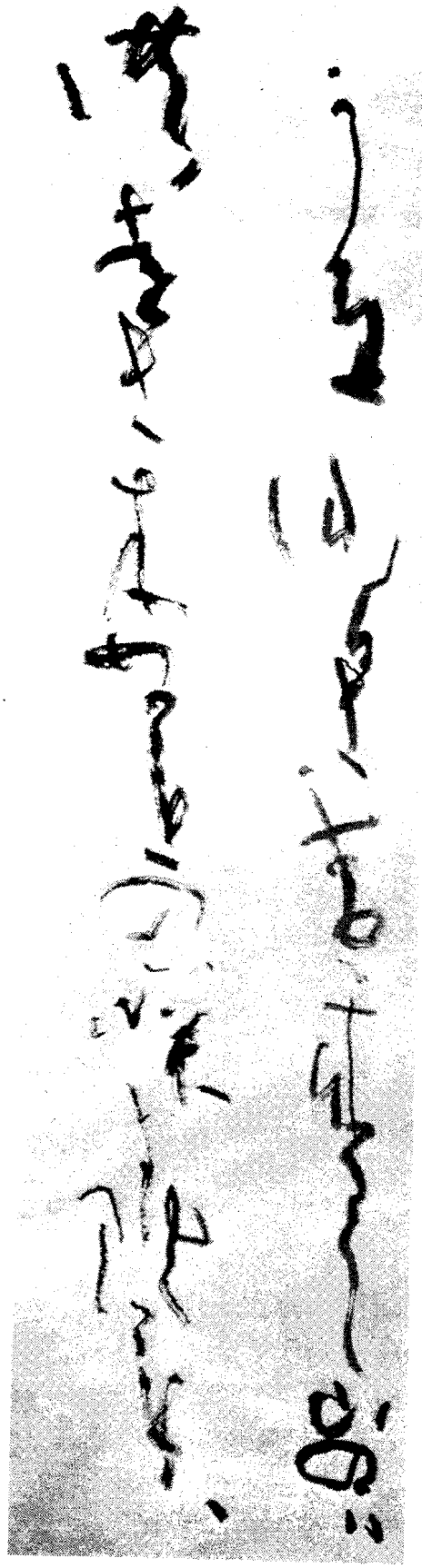
上條信山

青山杉雨

宇野雪村



熊谷恒子



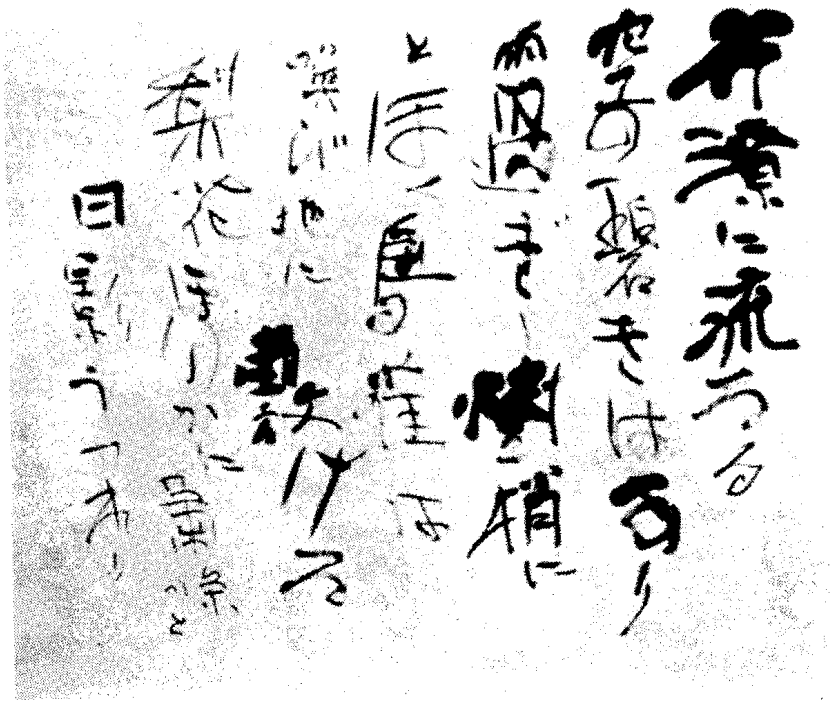
浮乗水郷

安藤搨石

今関脩竹

奥田家山

三田清白

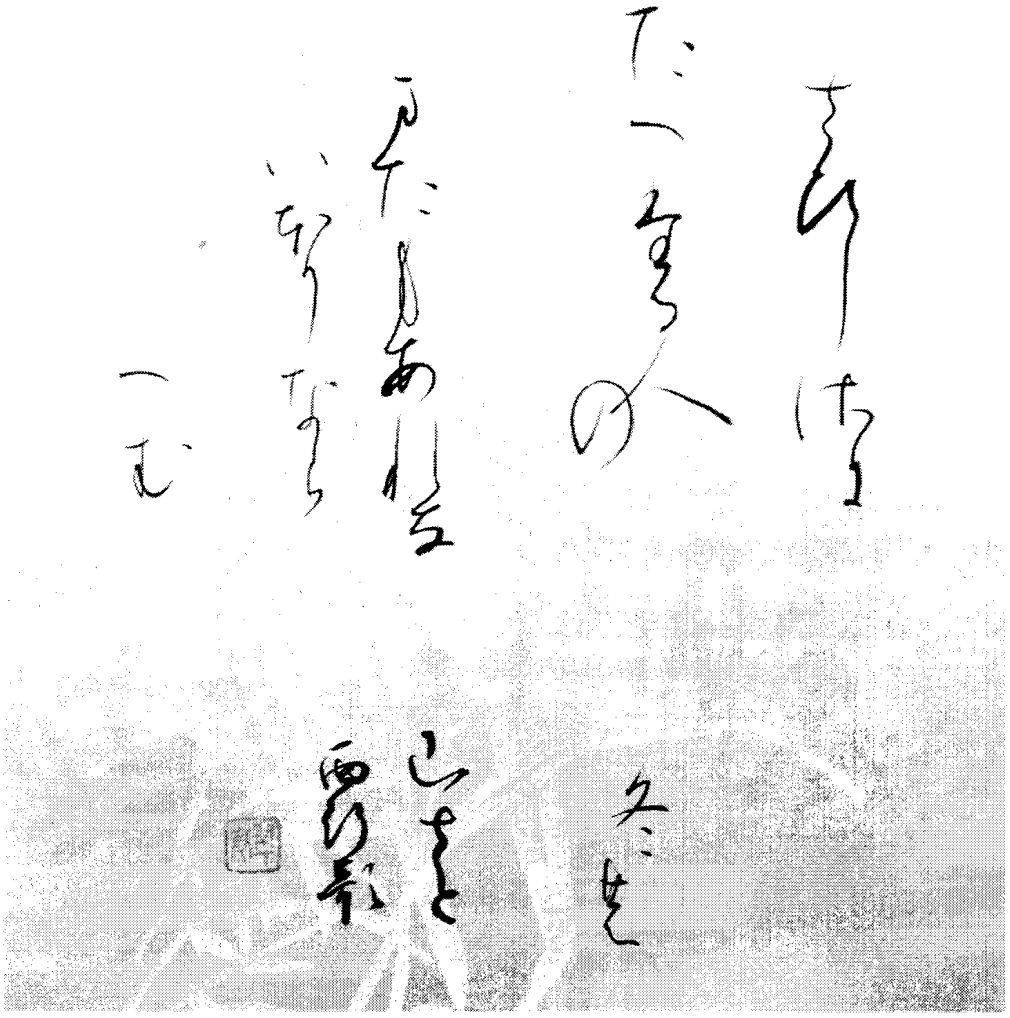


佐々木寒湖

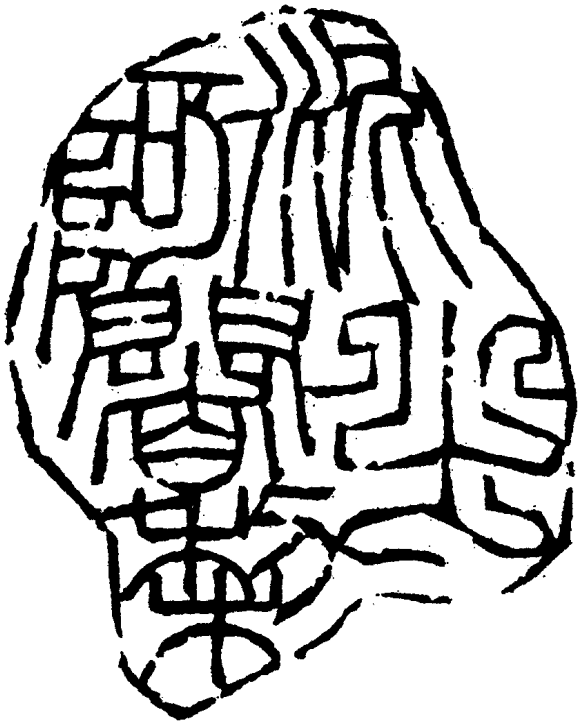
浅見篤洞

今井凌雪

永井暁舟

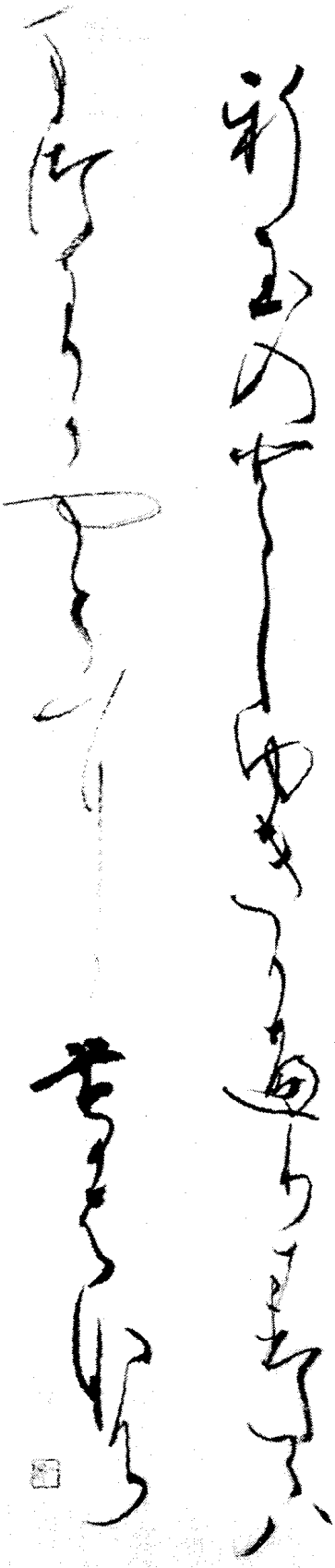


村上翠亭



古川　悟

菅原石廬



東山一郎